

「アジア・アフリカ地理言語学研究」令和 2(2020)年度第 2 回研究会

日時：令和 3 年 3 月 28 日（日）13:00–18:00, 3 月 29 日（月）9:00–17:45

場所：オンライン

使用言語：英語

Satoko SHIRAI (ILCAA Fellow)

“Theoretical Frameworks for Grammatical Relations in Asia and Africa”

アジア・アフリカ諸言語の文法関係に関する地理言語学的研究について、研究の目的と方法を示した。文法関係標示パターンは、標示の位置、格アラインメント、多様な分岐要件といった多岐にわたる問題を含んでおり、そのままでは一枚の地図を描画して地理言語学的分析を行うことが難しい。そこで、今回の共同研究では文のタイプを絞り、統一的な記号を用いることで全体像の把握を試みることを提案した。具体的には、述部の他動性が高いこと、項がともに有生性ないし共感度の階層で高位・同レベルにあること、情報構造が無標であることである。その上で、標示の位置と格アラインメントの両側面からの分類案を示し、議論の土台とした。

Nobuko KIBE (NINJAL), Kohei NAKAZAWA (NINJAL), Akiko YOKOYAMA (JSPS/ILCAA, TUFUS)

“Grammatical Relations in Japonic”

本発表では、日琉諸方言の文法関係を以下の 5 つのタイプに分けた。(1) A1-1: 主格対格型（主格・対格の両方が有標）、(2) A1-2: 主格対格型（有標主格型）、(3) A4: 主格対格型（形態的に無標）、(4) C1: 分裂自動詞型、(5) D1: 三立型。なお、琉球諸方言では、(1)(2) がそれぞれ名詞句階層によって格標識が変わる A1a-1 型、A1a-2 型となる。このほか、混合型の方言もある。

日本本土では、大きく A1 型が南部に、A4 型が北部に分布している。九州には C1 型と D1 型も分布しており、大阪では A1-2 と A4 の混合型、淡路では A1-2 と C1 の混合型が見られる。琉球諸島では、A1a タイプが全体に分布している。このうち、A1a-2 は徳之島から沖縄本島的那覇まで、A1a-1 は A1a-2 の周辺に分布している。最西端の与那国は動作主性に応じて S の標示が分かれる C1 タイプ、波照間形態標示を持たない A4 タイプである。

これらのタイプの歴史的変化は以下のように推定する。古代日本語では、格標識がないタイプから、主格対格型（主格を=ga/no、対格を=wo で標示）に変化した。ここから音変化により、=wo が融合、脱落して有標主格型（A1-2 型）となった方言や、さらに=ga が融合、脱落して無標型（A-4）になった方言がある。また、熊本方言のように=ga/no が分化して三立型（D1 タイプ）へ発達した方言もある。

Rei FUKUI (The University of Tokyo)

“Grammatical Relations in Korean”

韓国語は、形態論的には膠着語的であり、基本語順は SOV、格表示は後置詞により、従属部標示、アライメントは AS/P である。本プロジェクトの類型では A1 になる。こうした基本的な特徴に関して方言差は見られない。

ただし、格の標識は、特に、主格、対格などの場合日本語などと同様、付けられないことも多く、その意味では、述部に人称の特徴が反映されていると見ることもできる。また、中世韓国語では、多くの場合一人称の主語に呼応する「意図法」と呼ばれる -o- があるがその精確な意味機能に関しては研究者の間で意見が一致していない。

Ryo MATSUMOTO (ILCAA Joint Researcher, Kansai University of International Studies)

“Grammatical Relations in Tungusic and Uralic”

両言語とも膠着的形態構造をとり、文法関係も格を示す接尾辞によって表される。基本的に主格・対格による AS/P 型に分類されるが、P を表す手段として定性や完了性などが関わって区別される言語が多くあり、下位区分を設定して分類がなされた。

Yoshio SAITO (Takushoku University)

“Grammatical Relations in Mongolic and Turkic”

モンゴル系の一部とテュルク系のほとんどの言語において動詞に主語の人称と数が見られる現象が見られるが、今回の発表の内容は目的語が対格語尾を取るかゼロ語尾を取るかという現象に限定した。そこにはさまざまな要因が関わっていて簡単には規定できないが、すべての言語を通じて定性 (definiteness) ないし特定性 (specificity) が関与しており、その観点から見ると分布は一様である。

Satoko SHIRAI (ILCAA Fellow), Shiho EBIHARA (ILCAA Fellow), Kazue IWASA (ILCAA Joint Researcher, Nagoya University of Foreign Studies), Keita KURABE (ILCAA), and Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, Fudan University)

“Grammatical Relations in Tibeto-Burman”

チベット＝ビルマ系諸言語の文法関係標示パターンを調査し、地理言語学的分析を行った。まず、同語派内に見られるパターンを網羅して示した。多く見られるパターンは次の 4 タイプである。A1: 主格対格・従属部標示型、B1: 能格絶対格・従属部標示型、B3-1: 能格絶対格・両標示型で有生性分岐あり、E4: 中立・無表示型。このほか、A2: 主格対格・主要部標示型、A3-1: 主格対格・両標示型で分岐あり、A4: 主格対格 (SVO 語順)・無表示型、D1: 三立・従属部標示型、D3-1: 三立・両標示型で分岐あり、といったタイプが散見される。アライメントの相対的年代については、地理言語学的分析と論理的観点から、E: 中立型 > A: 主格対格型 / B: 能格絶対格型 > D: 三立型 であると仮定できる。また、主要

部への標示は比較的新しいものの、B3-1 能格絶対格・両標示タイプについては、主要部への標示が従属部の格標示体系よりも古い可能性がある。

Fumiki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, Nanzan University)

“Grammatical Relations in Sinitic”

中国語方言は、基本的に文法関係のマーカ表示がなく、自動詞主語・他動詞主語がともに動詞に先行し、他動詞目的語が動詞の後に置かれる語順をとることから、A4 (No-marking, AS/P)タイプに分類される。他動詞目的語は、「処置」を表す“把”を前置して動詞の前に置かれることがある。この“把”構文は A1 (Dependent-marking, AS/P)タイプに分類され、マーカの種類・用法などのふるまいに差異があるものの、ほとんどの中国語方言で観察される。そのため、地図上ではほとんどの中国語方言が A1 タイプと A4 タイプの記号の重ね打ちで表されるが、南方では“把”構文を用いず A4 タイプのみで表示される方言が散在する。SOV 語順をもつアルタイ諸語やチベット＝ビルマ諸語の分布地域に近い甘粛・青海方言では、他動詞目的語がマーカをとまわずに動詞の前に置かれる頻度が高く、他動詞目的語の後に置かれる“哈”も観察される。これらの方言は A1・A4・E4 (No-marking, ASP)の 3 タイプの重ね打ちで表示される。

Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University)

“Grammatical Relations in Kra-Dai”

今回は対象地点がごく限られてしまい、A4 以外のタイプを検出することができなかった。中国領内のクラ・ダイ語では中国語の「把」構文に相当するものも記述されていることが多く、A1 として重ね打ちしておいた。東南アジア部でも「把」に相当する au を使った動詞連続は存在するようだが、固定した表現とはなっていないように見える。SAAG に掲載する時点までに地点数を増やすことができる見込みである。

Atsuko UTSUMI (Meisei University)

“Grammatical Relations in Austronesian”

Austronesian languages exhibit a variety of grammatical relations in terms of case marking and alignment. It is sometimes hard to determine case alignment because some languages lack case marking system. The level of verbal morphology also varies: Taiwan and Philippine languages exhibit a rich morphology but Malayic languages as well as Oceanic languages show much simpler morphology.

Formosan and Philippine languages as well as Malayic languages are categorized into ‘symmetrical voice system languages’ which are supposed to have an alignment that are different from both ergative and accusative alignment. However, an overall consensus found among researchers who are working on Formosan and Philippine languages is that these

languages exhibit ergative alignment. In this presentation, I respected each researcher's analysis and concluded that ergative alignment is found among most of the Formosan and Philippine languages whereas accusative alignment is found in Indonesian languages. Oceanic languages exhibit both ergative and accusative alignment.

Makoto MINEGISHI (ILCAA) , Masaaki SHIMIZU (ILCAA Joint Researcher, Osaka University)

“Grammatical Relations in Austroasiatic”

オーストロアジア語族の言語の格表示は主格・対格型である。他動詞文の主語、目的語という中心的な格の表示に格標識を使用するかどうかによって、格標識を用いずに基本語順 AVP で格を表示する東南アジア (A4 型) の諸言語と、主要部表示の接語を用いる動詞後置 (APV) 語順のインドの諸言語との 2 つに大別される。両者の推移型諸言語として、中国雲南省のミャンマー国境付近のパラウク・ワ語、インド、アッサム州のカシ語系諸言語、ニコバル諸島のカー・ニコバル語がある。

Chikako ONO (ILCAA Joint Researcher, Hokkai-Gakuen University)

“Grammatical Relations in Chukotko-Kamchatkan”

チュクチ・カムチャツカ諸語において、名詞の格表示についてはチュクチ・コリャーク語派 (チュクチ語・コリャーク語・アリュートル語) は能格・絶対格型 (A/SP) であるが、イテリメン語は中立型である。動詞では A, S, P が標示されるが、コリャーク語では人称標示に階層上の反転があることが知られている。イテリメン語においては名詞で A/S/P の区別がなされないため、主要部標示型が強く現れる (別の格では二重標示となることがある)。

Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher, National Ainu Museum)

“Grammatical Relations in Ainu”

アイヌ語は主要部標示型の言語であり、文法関係標示については人称と数によって異なるタイプを示すため、これまで先行研究では混合型であるとされてきた (Bugueva 2012、奥田 2015 など)。1 人称単数の場合は主格対格型 (AS/P)、1 人称複数の場合は三立型 (A/S/P)、2 人称単数・複数は中立型 (ASP) である。質疑において、主語と目的語が同じ階層である場合には 3 人称の例しか得られないという確認があった。3 人称は中立型のゼロ標示であるが、アイヌ語の場合は階層的に主要部標示が失われたものと解釈できる。

Noboru YOSHIOKA (ILCAA Joint Researcher, National Museum of Ethnology)

“Grammatical Relations in South Asia”

まず、南アジアの言語を扱うためには、用意された分類用の「共通枠組み」では足りないことを述べた。更に、何を「標準」文と看做すべきかという話が十分ではなかったところか

ら、全パターンを平等に扱うこととしたのだが、そうすることによって一言語が1つから、最大7つものパターンを持つということとなり、分類がしきれたものではないという旨も話した。その上で、地域特徴を敢えて上げるとするならば、①全く標示をしない言語がインド洋島嶼部に偏っている点、②インド東部以東では一致が対格型、インド西部以西（パキスタン北部・アフガニスタン北東部を除く）では能格型と、真っ二つに分かれる点、③インド北部以北は徹底的に従属部で能格標識を持っている点、ならびに④パキスタン北西部・アフガニスタン北東部に、いわゆる他動格配列（transitive case alignment；S/AP）という珍しいパターンがまとまってみられる点を示した。③はドラヴィダ系との言語接触による影響などが考えられ、④は同地域のイラン系言語にも見られる。最後に、言語分類改良へのヒントとして、南インドの言語のみを典型的に分類するとしたらこうする、という提案を説明した。

Nozomi KODAMA (ILCAA Joint Researcher, Kumamoto University)

“Grammatical Relations in Dravidian”

ドラヴィダ系諸言語は、ほぼ主要部表示・従属部表示が共に対格型（ただし、従属部の対格表示は有生性・定性が関与）の形態表示となるものがほとんどであることを報告した。この点では隣接するインド・イラン系諸言語と対照的であり、言語接触によるとみられる変化も、格体系の変化（対格と与格の弁別喪失）にとどまり、能格型への変化は報告者の知る限りでは記述されていないことを述べた。

Takamasa IWASAKI (ILCAA Joint Researcher, JSPS/ Kyoto University)

“Grammatical Relations in Iranian”

現在語幹に由来する動詞述語の場合、ほぼ全てのイラン語派の言語において主格対格型が観察される。一方で過去語幹由来の時制については、主格対格型の他に能格型や類型論上珍しいとされる二重斜格型（S|AP）、三立型（S|A|P）を示す言語が多数存在する。更に主要部と従属部の標示タイプが異なる言語も複数観察される。またPの標示に関して、義務性の程度の差はあるもののDOMの体系がクルド語とバシュトー語を除く全ての現代イラン諸語に観察される。隣接するインド語派、チュルク語派にもDOMが見られるが、これらの言語との接触でDOMが導入されたのかは不明である。

Youichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, TUFS)

“Grammatical Relations in Semitic”

アラビア語、現代ヘブライ語、南アラビア諸語をA4（語順）としたが、動詞の人称変化はASに従うためA3（両方マーク）であるという指摘を受けた。セム語で最も広く分布しているのはアラビア語で、現代ヘブライ語、南アラビア諸語はその分布域の中にある。アラビア語の周縁方言、エチオピア諸語はSOV語順でありE4としたが、同様に動詞がASにより人称変化するのでA3となる。またPにも、定性が高いときには、アムハラ語は接尾辞

-n でマークしたり、アラビア語シリア方言は前置詞でマークすることがある。ほかに、トルコ・イラン・イラク国境付近の北東新アラム語には能格と見られる現象があるとの指摘があった。

Shuichiro NAKAO (ILCAA Joint Researcher, Osaka University)

“Grammatical Relations in Nilo-Saharan”

本発表では、ナイル・サハラ語族における文法関係の標示について、13 タイプ（分裂なし：A2, A3, A4, G1, G3、語順による分裂あり（いわゆる ‘no case before the verb’ の原則によるもの）：A1/A4e, A2/A3e, A3/A4e, A4/B3e、その他の分裂あり：A1/A4g, A1/E1g, A2/B2d, F）を区別してマッピングした。

Daisuke SHINAGAWA (ILCAA), Junko KOMORI (ILCAA Joint Researcher, Osaka University)

“Grammatical Relations in Niger-Congo”

本発表では、ニジェール・コンゴ語族に属する諸言語の文法関係表示に関する構造特性の概観を紹介した。ただしサンプル言語にはコルドファン語派に属する言語は含まれず、多くはヴォルタ・コンゴ語派、とくにベヌエ・コンゴ語派のバントゥ諸語がデータの大半を占めている点でサンプルに系統的な偏りがある。先行研究においてすでに指摘されているとおり、ニジェール・コンゴ語族の圧倒的多くの言語は形態論的な格標識を欠き、主格対格型以外の格配列を有する言語は極めて稀であると見做されている。したがって本調査では、i) 主語標示が動詞側で行われる（synthetic/head-marking）か否か（analytic/no-marking）、ii) head-marking であるとき、それは topic との一致を許容するか否か（つまり情報構造による影響を受けるか）、iii) 目的語標示が動詞側で行われる場合、アニマシーなどの外的な要因が標示の規則性に影響を与えるか、という3つのパラメータに関するデータを収集した。i) に関しては、すでに指摘されているように、（ごく一部のバントゥ諸語を含む）西部諸語においては analytic な no-marking タイプが広く観察されるのに対し、圧倒的多数のバントゥ諸語は synthetic な head-marking タイプと見做してよい。一方で、analytic でありながら動詞側で目的語標示を行う、また synthetic でありながら目的語標示は欠く、といった中間的なタイプも限定的にはあるが観察された。ii) に関しては、topic との一致を許容する言語は数的には限定的と見られるものの広範な分布が見られ、それがかなり古い段階から再建されうる言語特徴であるとの仮説をサポートするものと見てよさそうである。iii) については、系統的また構造的な均質性が高いと言われる東バントゥ地域で多様性に富む分布を見せていることから、動詞構造での目的語標示という操作自体が他の要因からの影響を反映させやすい形態統語的操作であること、あるいは言語接触等の他の言語からの影響を受けやすいことを示唆する可能性があるが、より詳細な調査・分析が必要である。

This talk presented an overview of typological features of expressing grammatical

relations and their geographical distribution in Niger-Congo. While we should admit the fact that the sample languages are genetically imbalanced in that we couldn't include data from Kordofanian languages and only a limited number of non-Volta-Congo languages are included, a fairly wide range of Bantu languages are within the scope of this investigation. As is broadly recognised in the literature, overwhelming majority of Niger-Congo languages do not show morphological case distinction and any alignment pattern other than nominative-accusative is scarcely observed. Thus this study focuses on the following three parameters; i) whether grammatical relations can be morphologically expressed on the verb (synthetic/head-marking) or not marked on the verb (analytic/no-marking), ii) in the former type, whether the subject marker may also agree with topic (i.e., subject marking can be influenced by topicality), iii) in the languages where object relation is synthetically marked on the verb, whether extra factors like animacy can affect structural regularity of object marking. As for i), as is widely accepted, the analytic type distributes extensively in the western area (including a bit of Western Bantu languages), while the synthetic type is the norm in the majority of Bantu languages. The intermediate types, namely 'synthetic but lacking object marking' type or 'analytic but with object marking' type, are sparsely observed mainly in the transitional area between western non-Bantu area and north-western to central Bantu area. Regarding ii), while the subject-prominent type outnumbers the topic-prominent (or topic-sensitive) type, the latter may be regarded as an archaic feature that can be traced back to a Proto Bantu stage according to its wide distribution across boundaries of Bantu-internal genetic groupings. As for iii), it is interesting to note that quite high variability is attested even in north-eastern Bantu area where structural and genetic uniformity is higher than, say western area. This may suggest, on the one hand, that at least in Bantu object marking may be seen as an inherently fluid morphosyntactic operation whose regularity is easily affected by external factors including animacy of referents. On the other hand, it may be suggested that object marking system may be easily influenced by other systems of neighboring languages in contact. These possibilities should be further investigated with more detailed data from a wider range of languages.

Kimihiko KIMURA (ILCAA Joint Researcher, TUFS), Hiroshi NAKAGAWA (ILCAA Joint Researcher, TUFS)

“Grammatical Relations in the Kalahari Basin Area”

本発表では、カラハリ言語帯の3語族の13の標本言語を用いて、文法関係の実現のタイプの地理的分布を観察した。現時点では、以下の一般化ができる：

- (1) 全標本言語において、主格-対格型のタイプが観察される。
- (2) 主格-対格型システムは、コエ・クワディ語族の言語では名詞の格表示として表現される

傾向が、他の2語族では語順によって表現される傾向が認められる。

Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, Fudan University)

“Stop Series in Asian and African Languages”

本発表では、本プロジェクト第1回会合「子音体系」の内容のまとめを報告した。歯-歯茎閉鎖音（口音・鼻音）を例に、アジア・アフリカの言語を俯瞰した。言語特徴として、有声性、帯気性、有声性と帯気性の総合、放出音、入破音、前鼻音、咽頭化音、無声鼻音、喉頭化音などを取り上げ、諸特徴をもつ言語群をまとめ、また、地理的分布の面で簡潔な考察を加えた。これにより、言語グループ内外の詳細な音韻特徴の地域的つながりが見えてきた。言語地図を作成することにより、特定の地域で言語接触がどのように発生し、機能したかを評価できると考える。

Kae KOGANEBUCHI (The University of Tokyo)

“Population Genomic Insights into the Ryukyu Islanders”

琉球を主対象としつつも周辺諸人類集団との遺伝学的関係を分かりやすく解説していた。[遠藤光暁記]